紹介

◎神と神を祭る者との文學

武田祐吉著

本書は著者が我が國の上代文學研究の所産を輯めて其の第一編として世に公にしたもので其の内容は(一)神と神を祭る者との文學(二)上代祝詞の本質(三)萬葉集時代に於ける神人の交通の三部から成つて居つて、各部の所說に多少の重複はあるけれども先づ第一部では神の文學卽ち神の創作と信じられた文學の存在を記錄の内に求め得べしといひ祝詞の内の或るものがそれであつて後に神を祭るものゝ側の創作の形式に於いて今日に傳へられ其の他神話も其の起源を神の文學に發してゐるとし神を祭るものゝ文學としては祝詞の一部神樂歌神歌等を數へてゐる。第二部では先づ我が上古に言語信仰のあつたことを述べ壽言の如く言語によつて祝福することは其の人の運命を幸福に導く力あるものと信ぜられた、其の言靈信仰は人格化せられ辭代主神一言主神等は恐らくはその言靈神であらう、而して祝詞の本質はやがて其の壽言であつて神の名によつて祝福することが安心或は隨喜せしめる上に偉大な力がのつたのである祝詞に宣命の形式のものゝあるのは神の託宣であつて、祝詞の形式によつて分類すると、各節の終が宣るといふ方が古い形であり宣命は畢竟祝詞から出たものであらうといつてゐる。第三部は萬葉集の歌の内に含まれてゐる宗教的名辭を拾拾して解釋したもので文學的の研究といふよりは寧しろ宗教史的の研究であつて、古代宗教思想に關する好筒の材料を提供してゐるものである。古代の宗教史料は普通は紀記の神代の卷に求めるのが常であるがこれは案外無價値なもので萬葉集は其の最も豐富な寶庫であり著者の努力は此の方面の研究者に恩惠を與へることが多いであらう。此の恩惠はまた本書の第一部第二部からも充分に受けることが出來る。著者は主として文學的な立場から研究せられたものであらうが問題の性質上却つて古代宗教思想史の

姿を呈してゐる。本書は上代の文學及び宗教に關して未だ誰も窺ひ得なかつた新境地を開拓したものである。著者は多年萬葉集の校勘の事に從ひ、又古代文學の研究に親しんでゐたものであつて、其の豊富な材料、嚴密な考證、鋭利な觀察によつて本書は非常に立派な成績を示すことが出來た。切に學徒の一讀を希望する。（定價二・三〇、東京古今書院發行）

●シーボルト先生渡來百年記念論文集

シーボルト先生渡來百年記念會は泰西の文物を輸入し我國に於ける近世文化の基礎を確立したシーボルトの我が國渡來後の百年に當つてそれを記念する爲めに記念式を擧げ名家に依頼して彼に關する論文を募り吳秀三博士に囑して其の傳記を編纂することゝしたが、本書は其の名家に募つて得た所の論文集である。容むる所は十篇の記事と其の參考とすべき精巧な圖版とであつて、内について「醫學者としてのシーボルト先生」（吳秀三）はシーボルトは獨逸に於ける第一流の醫學者の家系の出であつて、祖父、父、叔父、從兄弟等皆伯林其の他の諸大學に於いて外科産科等の教授であつた、且つ其の時代は醫學界に於いて種々の新治療法の發明せられた時代である彼は醫學者としての手腕は不明であるが和蘭が知識慾に渴してゐる日本へ其の家系と手腕とに信頼して特に彼を派遣して日本の欲求する處に要ぜしめんとしたのである彼は日本に來るや歐洲の新治療法を紹介し殊に外科眼科に妙技を示し、或は始めて種痘を實施したので蘭館に名醫ありとの評判高く遂に和蘭政府及長崎奉行の許可を始、鳴瀧に別邸を設けて一般の治療をし、又門弟を指導して創めて臨床講義の風を移植したことから其の我が醫學界に於ける影響を詳述してゐる「歐洲に於けるシーボルト先生」（コイペル）は彼が歸國後和蘭政府及び王室から優遇せられたこと其の日本採集品の保管、日本植物の移植より晩年の生活を述べた興味ある記事である。其の他「シーボルト先生略年譜」（武藤長藏）「シーボルト先生より日本學生に贈りたる書翰」（コイペル）「シーボルト先生採集日本産柑橘標本に就て」（田中長三郎）「シーボルト先生渡來の目的と日本に於ける交友」（村上直次

郎)「シーボルト先生と福岡藩人」(伊東尾四郎)「我國最初の商業學校創立計畫者としてのシーボルト先生」(武藤長藏)「シーボルト先生の大阪芝居見物」(白井光太郎)及びシーボルト先生孫女山脇タカ刀自の談話は何れも彼に關する有益にして興味深き遺聞を錄してゐる。(非賣品、シーボルト先生渡來百年記念會發行)

◉古版大坂地圖解說

商學士　佐古慶三編

此の書は古版の大阪町繪圖を解說した者である。江戸では此類の書に夙く澁江抽齋の江戸圖書目提要があるが京都にも大阪にも同樣の企が必ず無ければならないと期待せられて居つたが、前に大阪市史が編纂せられた時編纂員の一人が地誌の解題と共にそれを試みたけれども物にならなくて遂に公刊せられず、今此の書によつて始めて其の期待が滿足させられたのである。著者は大阪經濟史研究の餘業として本書を著し自費を投じて「道樂出版」として公刊したのであるといつてゐる。懷の豐な著者だけあつて其の凝り方は一通りでなく、三浦博士題筌の大

きな帙を開くと印度更紗の表紙、本文は土佐紙の大美濃で故原博士の題辭と坂口三浦兩博士の序文とはわざ〳〵支那に紙を送つて宋朝活字で印刷させ二十餘枚の鮮籠なコロタイプ版の挿繪まで挿入し、江戸圖書目提要に倣つたのであらうが各圖の解說にはそれ〴〵原圖の題筌を模刻してゐる。解說せられた町繪圖は約七十圖で必ずしも多くはないが、これは古い一二を除く他皆著者の自藏のみに據つたのである。只著者が更に諸方面を採訪して完璧を期する努力を惜まれたのは少し物足りないけれども それも所謂道樂出版の爲めと見れば致方はない。町繪圖の解說の間に卷頭に浪華往古圖を容められたのは些か水に油の混じた感があるが、從來大阪最古の町繪圖として著名であつた明暦三年板の新板大坂之圖以前に既に明暦元年の新板攝津大坂東西南北町島之圖のあつたことを始めて紹介せられたのは驚くに足る。更に驚くべきは其の大坂最古の町繪圖で且つ正しいものと信じられてゐた、新板大坂之圖や及び此の大坂東西南北町島之圖一類の町繪圖は何れも後世好事家の假作であると斷定したことで

ある。著者の論據は町名の命名法が不自然であり、現存の島之内の水帳記載の沿革に符合せず、通の町名のみあつて筋の町名なき事等で誠に動し難い確論である。明暦圖の町名が大坂に關する多くの記錄に一切所見なく且つ北組惣會所舊藏の延寶頃の圖とも全く聯絡がないので其の理由について多くの學者を苦しましめ遂に大阪市史の如く古い町名の保存せられてゐるものではあるまいかとも考へしめたがそれも著者のいふ通り寛永の水帳にも抵觸する所があるので終に救ふことの出來ないものとなつた併し慶長の江戸庄圖の樣なものと違つて此の一類の圖の異版が餘りに多いのは好事家の假作としてしまふのには餘程不自然な感がある。これは三浦博士が序文中にいはれた樣に京都の書林の机上の測量になつたものがあつたのだらうといふ事も考へて見る必要があらう。著者の此の鋭利な觀察は所謂貞享三年板の大坂大繪圖にも及んでゐる。此の圖は著者に罵倒せられた某氏は別として多くは貞享の眞圖だとは心得てゐない著者は誰もがする通り城代定番奉行等の在職年月と新地の開發とによつて新物を古粧したものだと斷じられたが或は貞享の古版に入木して改訂を加へ刊記だけを元のまゝにして置いたものであつたかも知れない。たゞ今日世に存じないけれども他日貞享の眞圖が世上に現はれる日があれば此の疑問は解決するであらう。而もそれが世に出現する事が全く不可能だとも斷じられないであらう。古版の町繪圖に入木して改訂を加へることは常の事で「毎月改」と標榜した圖がある位である。吾々の目堵したものにも天保の刊記があつて川口の居留地が明記してあるものがあつた。貞享三年板の大坂大繪圖も此の類のものであつたとも考へられるではなからうか。本書を通じて著者の勞を多としなければならないのは各圖の町名に誤脫があるのを一々詳細に訂正せられてゐることである。これは大坂の古町繪圖を史料として使用するものに對する無二の寄與である。更に本書の特異なる色彩は其の筆鋒の頗る鋭利な事で先人の陷つた微小な過誤も決して見逃すことなく飽くまで追及してゐる、殊に前にいつた大阪市役所の某編纂員の書いた未刊の草稿を槍玉に擧げてゐるのは少し殘酷な感

がある。（賣價一三・八〇、大坂だるまや書店發賣）（以上岩橋）

●慶州金冠塚と其の遺寶　上冊

大正十年の秋、新羅の舊都慶州邑の入口に於いて偶然發見せられた一積石塚の埋藏品は、其の質より見るも、また量の上よりするも、我が領土内空前のことに屬し、東亞に於けるツタンカーメンの墓とも云ふ可き重要さを持つ一大發見であつた。されば朝鮮總督府では當初關野、濱田兩古蹟調査委員等に囑して實地の調査を行ひ、後遺物の京城に移さるゝや、濱田博士監督の下に、梅原、小川兩囑托をして專ら整理に任に當らしめて完全なる報告書の作製を期したが、爾來三年の歲月を費して頃日やうやく全部の調査の完成を見るに至り、今まや濱田梅原兩氏の提出した本文と圖版との二部より成る報文の上半が、「慶州金冠塚と其遺寶」と題して、總督府の古蹟調査特別報告の第三冊として印行を見たのは大いに慶賀すべきことである。本報告の本文は四六倍版百七十六頁と英文の梗概三十頁とから成つてゐて、初に古墳の形狀と封土の築成とを說き、發掘に從事した諸鹿、大坂等諸氏の云ふ處に基き副葬品の埋沒狀態を叙して棺槨の構造に及び、出土の品目を列記して遺物の豐富さを示して第一章の序說を終へ、第二章以下を一々の遺物の起述に當てゝ、先づ初に各種の容器類の章を設け、土器からはじめて、鐵釜、金屬製容器、漆器及木器玻璃器等と節を分つて器形から其の特質に亘り記載する處あり、第三章は裝飾品の（一）として、精巧な黃金製の耳飾をはじめ、頭飾の玉、釧及指輪、金色粲然たる銙帶類と腰佩願等被葬者の佩した裝身具を細說し、なほ二足の飾履を擧げて上冊を終へ、金冠はじめ自餘の裝身具馬具、武器其他を下冊に讓つてゐる。別冊の圖版は如上の記述に對應する遺物の集錄であつて、四六四倍版の大きに精巧な玻璃版に色刷なぞを加へて、其の復寫に意を用ひた堂々たるもの、金冠塚の報告としてふさわしい感を與へる。上に記した遺寶の報告は稀に見る精良品を諸方面から觀察記載すると共に、これを既出の諸例と比較し、また東西の文獻、遺物を參酌して一々の源流に遡りて其の性質を明確なら